

どんな人になりたいか / どんな人を育てたいか （ ＜特集＞大学の語学教育を考える）

著者	三木 ひろみ
雑誌名	筑波フォーラム
号	57
ページ	29-32
発行年	2000-11
URL	http://hdl.handle.net/2241/8389

どんな人になりたいか／ どんな人を育てたいか

三木ひろみ

体育科学系講師

外国語がどのくらいできないと留学できないか

外国語，特に英語の教育が議論のテーマとなるのは，あれだけの年数を費やして役に立たないのでは意味がない，何かが間違っているはずだと思うからだろう。折しも国際化社会，就職難の時代である。パソコンくらい使えなくは，インターネットを使いこなせなくては，英語ができないことには，という訳である。

それはそれは，何でもできた方が，できないよりはずっといい。英語圏に留学したいと相談に来る日本人学生は，必ず「英語はどのくらいできないとダメですか」と尋ねる。答えることはいつも，「できるだけ。でも，英語ができてでもできなくても，最初の3ヶ月が苦しいのは誰でも同じ。」そして，「それから後は，英語の問題じゃない。」自分自身もアメリカに留学する時に思った。もっと英語ができれば，統計や情報処理が得意だっ

たら，関連領域の基礎知識がもっとあったら，自分の研究能力にもっと自信が持てたら，…。でも，もしそうだとしたら，留学する必要はあるのか。日本を発つ直前にそう思えたので，無かった能力を身につけ足りないものを補う努力が意識的にできた留学は，自分にとって成功だった。

商社マンと商社マンの外国語，どっちが先か

ビジネスの最前線では英語の使用頻度は非常に高い。だが，英語を使って仕事をしている人たちが皆もとから英語ができたわけではない。英語が得意でなかった人たちでも，仕事で使わなければならなくなると短期間でできるようになる。37歳商社マン「中，高，大と10年間日本の英語教育だけで，英語は話せますし，読めますし，書けます。何故か？商社に就職して，外国に6年間暮らしたからで

す。3ヶ月程度暮らしたら、殆ど出来るようになりました。何故か？小生は日本の英語教育を割とまじめに受けたので、文法がかなり頭に残っていたからです。文法を理解していれば、外国語は割と早く習得できます。あとは、本人のやる気です。」(Web上のバトルトーク「『英語を日本の第2公用語に』この提案にあなたは賛成？反対？」に投稿された意見)。英語はもちろん、スワヒリ語など数カ国語しゃべることができるある人は、「僕は学生の時、英語は100点満点の30点以上とった記憶がないほど劣等生であった。が、後に海外で働くようになって1～2年で、会議などでも不自由を感じなくなった。語学も、感性と理解力、相手がどう感じるかを意識しながら自分の言いたい事を整理する能力が基本なのだ。決して、いかに単語を多く覚えるか、高度な文法を知っているかではない。」(Web上のバトルトーク「『小学生に英会話・大学入試にリスニング』日本人の総バイリンガル化にあなたは賛成？」に投稿された意見)。ここで指摘したいことは、まず、必要性があれば、やらなきゃならなくなれば、できるということである(あるいは、できなければやめるしかない)。そうだとすると、社内教育ではなく大学を卒業する前に身につけておい

てほしいというのが企業側の意見だろう。だとすればいかにして。

全知全能の言語能力

外国語ができるようになるために必要だと言われること、これがないからできないのだと問題にされることも様々である。「日本語の会話や文章作成の技術がしっかりと教育されていない」、「日常的に触れる機会が十分なければ」、「言葉を伝える能力 文章の構成力、表現力など」、「臆せず会話する姿勢」、「論理的に文章を読解する能力、および、論理的な文章を作成する能力」等々。「言葉など道具に過ぎず、真に学ぶべきは、その単語が対象とする意識の中のイメージーションの深まりなのだ」とか。これらの能力が全て満足がいくくらい高ければ、何をやっても成功しそうである。

在る能力をフルに発揮；理屈じゃない生きる力としての外国語習得

途中の計算式をいくつも飛ばして説明し、日本語もその調子の、根っからの理系人間の例を一つ。場数も踏んで国際的な研究者になったが、英語は、基本的には専門用語を投げつけているような乱暴な英語である。姓の他に名前が4つもあるイギリスの良家の子息と一緒に研究を

しているが、御子息は理系氏の乱暴な英語から自分に必要な情報をうまく引き出し、乱暴者は英語らしい表現を御子息との会話から少しずつ拾ってものにしていく。大学では、EGP（一般的な目的のための英語）の上にEGAP（一般的な学問的目的のための英語）、その上にEAP（学問的目的のための英語）と3段階で英語力をつけていくべきだという意見がある。だが、これは必然ではない。乱暴者の理系氏は、中国語のゲームにはまったために大学でのEGPに落ちこぼれそうになり、もともとバンケットの席で気のきいたジョークを言うようなEGAPは性格に合わず、EAP一本槍だったが、EAPの能力が上がるにつれてEGPもEGAPも向上していった。あれもこれも、確かにあればいいが、全て揃わなくてもなんとかなる。学校で基礎的な文法をきっちりマスターしていたから助かったという商社マンもいれば、文法も語彙もだめだったけど感性と理解力で乗り切れたという商社マンもいる。とりあえず自分に在る能力をフルに使って始めれば、他のものも少しずつ揃っていくはずである。

危機からは逃げる、夢は追う

必要なのは、全てが揃っていない状態でも、とりあえずは在る力で努力を始め

させる動機づけである。動機づけは、強さと方向を持っている。例えば、「英語くらい使いこなるのは常識」と強調したり、英語を得意だという学生に、受験英語の能力しか持っていないことを自覚させるなどして、危機感をあおって何とかなるかもしれないのは動機づけの強さだけである。しかし、その気になったところで、ではまずこれを、次にこれをと、延々と続くステップを示したり、あおり過ぎたりすると、開き直りの気分を引き出してしまう。

より大事なものは、動機づけの方向だろう。どんな自分になりたいかということである。この社会で外国語の能力がそれほど必要とされているならば、なりたいた自分のイメージを、何らかの形で外国語を使っている自分のイメージとして描くことが可能なはずである。学生は、外国語を自由に操るやり手の商社マン、勝利者インタビューに英語で応えるトップアスリート、国際会議・国際誌にどんどん発表する研究者者といった曖昧なイメージしか抱けないかもしれない。教育組織は、そうなりたいたならどんな英語（外国語）をどのように使いこなさなければならぬのかということをも具体的に示せなければならない。最終的にどんな風に外国語を使いこなす自分にならなければ

ならないのかを具体的に示し、そこに行きつくための明確なトレーニングプログラムを実施することである。「まず第一段階として一般的な英語をこの程度まで」と言い出さないこと。球を打たせないで、「とりあえず素振り100回」と言うようなものである。打っているうちに(打とうと思って空振りを繰り返しているうちに)、足りないところや欠点が分かれば、筋トレが必要な人は筋トレに、素振りが必要な人は素振りに励むようになるのではないか。その時点でそう奨めればいい。メインのトレーニングプログラムの他にサブメニューも各種取り揃えあれば完璧である。

学ぶ者がああいう風になりたいという夢を持つことができ、足りない能力で始めても行き着くことができるという希望が持てることが大事である。国際的な人材を養成するという夢を、教える側だけが見ているだけでは何にもならない

本学出身の国際人

学生の英語力(語学力)が不足していると言う時に、その英語力(語学力)とは具体的にどんなものか、その学生に不足しているのは何かということを明確にできなければならない。どんな学生にどんな語学力が要求され、どこが不足して

いるかをどう診断するかということが明確にされているだろうか。言葉は生き物であり、mouseがclickされる時代である。これまでのように、求めている英語力は英検?級レベル、不足しているのはリスニングの能力、というようには答えられないはずである。

「いくら就職難の時代だからって、大学は専門学校と違うんだから、そんなに職域を意識しなくても」と言われるかもしれない。大学は教育機関である。そして、どんな教育組織であるかは、どういう人材を育て輩出すべきと考えているかに基づいている。大学が、それぞれの教育組織が、独自の規準・理想像を設定して実現していく点は、資格を取らせるだけの職業教育とは異なるはずである。本学の学生は全て英検?級以上の英語力を持っていると言うことの方がずっと専門学校的だろう。

卒業要件である語学の検定試験に落ちて退学した学生が、社会に出て自力で自分の役に立つ語学力を身につけ、その領域で国際的に活躍する人物となった時、「うちの大学の出でね。学生時代は語学が全く駄目だったのに、大したものだ。」と感心するのは、恥ずかしいことではないか。

(みきひろみ 体育心理学)